The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	台湾における言語使用と母語意識にみる帰属意識 ー小学校での閩南語履修者を事例にー
Author(s)	呉, 素汝
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/72220
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　呉　素　汝　）	
論文題名	台湾における言語使用と母語意識にみる帰属意識 ―小学校での閩南語履修者を事例に―

論文内容の要旨

本論文は、台湾の小学校で行われている郷土言語教育を受けている児童たちを対象に、彼らの言語使用状況と母語に対する意識を調査し、その分析を通して、共同体に対する自らの帰属意識について考察したものである。

本論文は全部で8章から構成されている。以下にそれぞれの内容を要約する。

第1章では、本研究の背景、問題意識、本研究の目的と本論文の構成を述べた。被植民支配の歴史的背景を持ち、移民・多言語社会の台湾での若い世代が旧支配者の言語を自身の母語として認識しているならば、エスニックアイデンティティと異なった新たなアイデンティティが形成されると仮定し、台湾アイデンティティをめぐる先行研究を整理した上で、研究対象として小学校で閩南語教育を受けている児童たちに着目することとした。

第2章では、台湾社会の人口構成と言語教育政策の2つの側面から、台湾社会における言語の多様性を概観した。今日の台湾では、旧支配国／旧支配者の言語(日本語、「国語(台湾の中国語)」)、諸エスニックグループの言語(原住民語、閩南語、客家語)に加えて、国際結婚によって台湾に移住してきた人たちの言語(「新住民言語」と称す)が併存している。学校における多言語教育の推進状況を通して、台湾社会の言語状況が今後、より複雑化していくと予想される。

第3章では、まず本研究に関連した台湾を研究対象とした言語選択と使用に関わるアイデンティティ研究と、母語に対する意識に関わるアイデンティティ研究をレビューし、それぞれの成果と課題を検討した。次に、本研究の枠組みと用語概念を提示し、本研究の位置づけを述べた。

第4章では、第3章での論考を踏まえ、本論文のリサーチクエスチョンを提示し、続いて、調査方法、調査を行う地域の選定方法、研究対象となった2つの学校と協力者の内訳を示した後、本研究の分析手法と視点を説明した。具体的には、国語環境と見なされる台北市にあるS小学校と、閩南語環境と見なされる嘉義県にあるD小学校の5年生に対してアンケート調査と半構造化インタビューを行った。それに加えて、台北市と嘉義県での伝統的な市場、百貨店やクリニックなどへの現地観察調査をも行った。

第5章では、私的な場面と公的な場面における二校の児童の言語使用状況に関するアンケートとインタビューの結果を分析、考察した。また、特に学校への現地観察調査の結果を援用し分析した。その結果、アンケートでは家庭内と学校を除いた公的な場における二校の児童の言語使用に異なる傾向があることと、考える時と学校内における二校の児童の言語使用に同じ傾向があることが示された。一方、インタビューの回答結果を合わせると、児童の世代の中で国語は公的な場面から私的な場面に至るまで広範囲に使われているのに対して、場合によっては、英語が使われる状況もあるが、閩南語の使用場面と対象者が限定されていることが明らかになった。また、国語は台湾人に対する帰属意識を表す機能と、国語を話す世代としてのアイデンティティとしての象徴的機能を持つ一方で、閩南語は家族との間の絆の土台であり、年配の世代と付き合う言語として機能していることがわかった。さらに、児童の言語使用においては、彼ら自身の心理的要因、政治的要因、社会・文化的要因、言語環境的要因、家族的要因などが絡み合って影響を及ぼしている。

第6章では、二校の児童の母語に対する意識に関するアンケートとインタビューの結果を分析、考察した。本研究では、台湾における「母語」概念に加えて、スクトナブ＝カンガス他(1989)が提唱した「母語」基準(出自・能力・機能・アイデンティフィケーション)を用いた。その結果、アンケートでは二校の児童の回答に同じ傾向が示された。インタビューの回答結果を合わせると、スクトナブ＝カンガスらが考案した機能の側面から言う「母語」の捉え方には台湾における状況を十分に捉えきれないという限界が存在することがうかがえた。また、児童自身が捉える「母語」というアイデンティフィケーションの側面から言う「母語」に関しては、国語かつ閩南語ないし新住民言語のような複数の言語になる者が最も多く、次に国語の1言語になる者、閩南語の1言語になる者となっている。この結果から、児

童自身が捉える「母語」は出自、能力と機能の側面から言う「母語」と一致しない場合があるとした上で、従来台湾社会における「母語」との間にズレが生じていることが明らかになった。その中で、児童の世代では国語は台湾社会から家庭内にまで関わるものであり、閩南語は家族、エスニックグループに関わるものであることがわかった。さらに、児童の母語に対する意識の形成に影響を与えている要因として、彼ら自身の心理的要因、政治的要因、社会・文化的要因、言語環境的要因、家族的要因などがあげられた。

第7章では、まず第5章と第6章での分析結果を踏まえ、インタビューの回答結果を通して児童たちの言語アイデンティティについて論じた。次に、二校の児童の共同体に対する自らの帰属意識と言語意識に関するアンケート調査とインタビュー調査の結果を分析、考察した。彼らの言語アイデンティティ特性については、国語、閩南語、あるいは国語かつ閩南語を自身の「母語」として自覚している二校の児童は日常生活の中でそれ(ら)を選び出して対話を行っていることがわかった。これにより、彼らそれぞれにとっての「母語」(国語ないし閩南語)アイデンティティが形成されていると推測された。また、上の世代が行う家庭の言語教育、上の世代が持つ帰属意識、学校における国語教育と郷土言語教育、台湾の社会的背景(母語保護運動の推進など)は、彼らの「母語」使用に対する意識、エスニックアイデンティティと台湾人アイデンティティの醸成に関与していることが明らかになった。児童自身による共同体への帰属については、アンケートでは二校の児童の回答が同様の傾向を示した。インタビューの回答結果を合わせると、自分を台湾人の一員のみとして考える者は5割を超えており、自分を複数の共同体の一員として考える者は4割いるだけでなく、彼ら自身が帰属を認める共同体に対して肯定的な感情を持つ者が多いことがわかった。言語意識については、アンケートでは「言語の伝承意識」という項目だけにおいて二校の回答傾向が異なった。一方、インタビューの回答結果を合わせて全体的にみた結果、二校の児童にとって家庭言語のような家族と深く関わる言語は閩南語だけでなく、国語もその1言語になったことと、国語かつ閩南語は台湾人アイデンティティを象徴するものであることが明らかになった。ただし、閩南語が結び付けられる「台湾人」は2つの側面をもち、1つは閩南人というエスニックグループを表す側面、もう1つは閩南人に加えて客家人や原住民族などの多元的な「台湾人」を表す側面である。さらに、彼らが抱く共同体に対する帰属意識の形成に影響を及ぼす要因を検討した結果、児童自身の心理的要因、政治的要因、社会・文化的要因、言語環境的要因、家族的要因、社会的要因などがあることがわかった。

第8章では、本論文をまとめ、本研究の意義と今後の展望について述べた。従来、小学校の児童を対象とした郷土言語教育に関する研究は、郷土言語を児童の母語として扱って調査を進めたものがほとんどである。しかし、今日の台湾では実際、旧支配者の言語(国語)が家庭内に浸透し、若い世代の使用言語も最初に獲得した言語などがエスニックグループの言語から国語へとシフトしているのが現状である。また、台湾をめぐるアイデンティティに関する研究は歴史学的、政治学的なものが多くある。本研究は、台湾社会における言語的多様性を人口構成と言語教育政策の観点から概観し、言語選択と使用および母語に対する意識に関わるアイデンティティについての先行研究を整理した。その後、小学校における閩南語教育を受けている児童たちを対象にアンケート調査と半構造化インタビューを行い、彼らの言語使用の実態、彼らの持つ「母語」観、彼ら自身が抱く共同体に対する帰属意識と言語意識が明らかになった。その中で、彼らの言語使用状況、母語に対する意識の形成と彼ら自身が抱く共同体に対する帰属意識の形成に影響を与える要因には共通しているものもあれば、異なるものもあることがわかった。また、彼らの言語使用と帰属意識は彼らの母語に対する意識に影響を与えていること、言語使用と帰属意識の間で影響しあっていることも確認できた。さらに、彼らによる「母語」使用に対する意識ならびに上の世代と台湾の政治的・社会的背景に関与し与えられた帰属性を検討した結果と、彼らが抱く共同体に対する帰属意識と言語意識に関する調査結果を合わせてみれば、上の世代と台湾の政治的・社会的背景は児童たちのアイデンティティ形成の過程において大きな影響力をもっている一方、児童たちは自身の選択や経験に基づき、自分にとって重要なもの(言語、共同体への帰属)を選びとっていることがうかがえた。その中には、例えば「国語／新住民言語＝母語」、「私＝台湾人＋閩南人＋ベトナム人」のような、以前の台湾社会には存在しなかった組み合わせをあげる者もいた。これにより、台湾人とは単一で均質的な共同体ではなく、台湾独自のある複合的な共同体として再構築されていくと予想される。したがってこの研究は、今後の台湾の若い世代を対象とする台湾人アイデンティティをめぐる研究に異なる視野を持たせるという意味で新たな知見をもたらすものであると考える。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　　呉素汝　　）		
	（職）	氏　　名
論文審査担当者	主 査　教授	伊勢　芳夫
	副 査　准教授	西村　謙一
	副 査　教授	村岡　貴子

論文審査の結果の要旨

呉素汝氏の博士論文『台湾における言語使用と母語意識にみる帰属意識―小学校での閩南語履修者を事例に―』の研究目的は、台湾における言語使用と母語意識を調査し、そこから見えてくる帰属意識を明らかにするということである。

呉氏の博士論文の構成は以下のとおりである。

第1章では、言語とアイデンティティとの関係について先行研究をもとに説明するとともに、旧支配者だった国民党政府が行った抑圧的な国語教育から大きな影響を受けつつも、台湾の民主化と「台湾化」が進行する台湾社会の母語意識と帰属意識を研究する目的と意義を述べる。第2章では、台湾社会の人口構成と、日本統治時代から現在に至るまでの言語教育政策を概観し、現在台湾に存在する複雑な言語的多様性、及び台湾の小学校での言語教育を論じている。第3章では、台湾における言語選択と使用、母語に対する意識とアイデンティティに関わる先行研究を検討し、そしてそれらの成果と問題点を踏まえ、従来台湾で用いられる「母語」概念とスクトナブ＝カンガス他(1989)による4つの「母語」基準を基にして研究協力者の母語に対する意識を調査することを説明している。第4章では、本論文の3つのリサーチクエスチョン、具体的な調査・分析方法、調査対象の台北市にある公立S校と嘉義県にある公立D校の概要を説明している。第5章では、S小学校とD小学校のそれぞれの閩南語履修児童へのアンケートとインタビューデータを使い、ドメイン別に彼らの言語状況を分析している。第6章では、スクトナブ＝カンガスらが提唱した「母語」概念を用いて、上記の閩南語履修児童にとっての「母語」を調査した結果から、「母語」の基準である出自、能力、機能とアイデンティフィケーションの側面に照らして彼らにとっての「母語」とは何かを明らかにする。第7章では、小野原(2004)の言語アイデンティティの観点から閩南語履修児童の抱く共同体に対する帰属意識のあり方を、アイデンティティ形成の立場から考察を行っている。第8章では、前章までの分析を基に、閩南語履修児童たちの母語に対する意識のあり方、共同体に対する帰属意識のあり方についての総合的な分析を行っている。

現在の台湾は、1980年代半ば以降の民主化の流れから郷土言語に対する意識が高まるなかで「台湾人」意識が強くなってきているのであるが、呉氏の博士論文においては、その「台湾」という共同体意識のコアとなる言語は、先行研究で提示されているような郷土言語というよりは、国民党政府によって強制された北京語官話を基礎にした「国語（中国語）」であるということを、綿密な調査分析から明らかにしている。いわば中国語が台湾人の自家薬籠中の言語とし、台湾社会のコア言語の位置を占めるようになってきているというのである。

呉氏は、アンケート調査及びインタビュー調査によって得られたデータを極めて丹念に分析をし、多数の発見をしているところは高く評価できる。また、調査フィールドが他民族によって何度も支配を受けた台湾ということもあり、支配者の交代と言語政策の転換が母語意識、及び、帰属意識にどのような影響を与えたかという研究は、そもそも「母語」、「帰属意識」とはどのようなものかを考えるための重要な知見を与えてくれるといえる。確かに、調査対象が台北市と嘉義県のそれぞれの小学校の児童のみであり、台湾全体の傾向とは言えないかもしれないが、台湾における母語及び帰属意識を明らかにする研究の第一歩としては、十分すぎるほどの研究成果をあげていると評価できる。したがって、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。